

Face to Face



TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター

No.39 2015年1月号

ザンビア 母子保健プロジェクト

2014年4月から開始したプロジェクトについて、報告します。

👉p.2-3

ザンビア募金続報

皆様からご支援いただいた寄付金の使途について、報告します。

👉p.4

カンボジア便り

昨年9月に保健医療専門家がカンボジアへ渡航しましたので、報告します。

👉p.6

JICA青年研修

JICAの青年研修「母子保健管理コース」の受け入れについて、報告します。

👉p.7



緑の大地に3棟目のトイレ（右端）が完成しました。（4ページ参照）

チサンバ郡 総合的な農村母子保健

竹村 俊男（コミュニティ活動専門家）



住民保健委員会メンバーと、活動結果を振り返ります。

診療所スタッフを交えてのディスカッション。

活動計画評価会議を開催しました！

地域の母子保健改善のためには、地域と保健医療サービスをつなぐ窓口である住民保健委員会の機能強化が不可欠と本プロジェクトでは考えています。そして、モンボシ地域に存在する10の住民保健委員会が組織として成長していくためには、それぞれの住民保健委員会が「活動計画の策定→実施（進捗確認）→評価→次の活動計画への反映」というサイクルを小さく繰り返して、活動経験を積み重ねていく必要があります。これまで昨年の8-9月に「活動計画策定会議」、9-10月に「活動計画モニタリング会議」、11-12月に「活動計画評価会議」を実施し、そのサイクルが初めて一巡することになりました。前者2つの会議については前号（2014年10月号）で触れましたので、今回は「活動計画評価会議」について説明させていただきます。

昨年の8-9月に各住民保健委員会が策定した3か月の活動計画は、「出張健診の運営を改善する」、「マラリア予防のために蚊帳使用の啓発活動を教会で行う」、「下痢を防ぐために学校のトイレに手洗い場を設置する」、「地域の保健課題を調査するために家庭訪問を行う」など様々でした。「活動計画評価会議」の目的は、その活動計画の実施結果の確認と評価を行うとともに、得られた経験や反省をもとに次の3か月の活動計画の策定を行うことです。会議では、住民保健委員会のメンバーから活動計画の内容を改め

て説明してもらい、また活動計画が実際にどのように行われたのか、手順を一つ一つ確認していきました。その上で、活動計画のどのような点が良かったのか、上手く行かなかったのか、次の活動計画に活かすべき教訓はあるか、皆で検討しました。

結果として、実施予定の遅れが見られた住民保健委員会もありましたが、全ての住民保健委員会が活動計画をおおむね実施することができており、こちらの想定を上回るものでした。一方、委員会メンバー達も活動計画を実施していく中で手ごたえを感じていたようです。「役割分担をきちんとすることで、活動計画をやり遂げることができた」、「診療所に報告書を提出するようになった」、「活動に参加するメンバーの数が増えた」などの声が聞かれました。また、会議に参加した診療所のスタッフも、住民保健委員会が啓発を行うだけに留まらず、さらに家庭訪問などで啓発の効果を確認するなどしている点を高く評価しています。しかしながら、「住民保健委員会のメンバー全員が活動に参加している訳ではない」、「メンバー内での知識や技術の共有が十分ではない」などの課題も挙げられました。

今後も「活動計画の策定→実施（進捗確認）→評価→次の活動計画への反映」という一連の流れを積み重ねていき、これらの課題を解消しつつ住民保健委員会の更なる能力強化を図っていきます。

を支える”地域力”強化事業

杉本 尊史（保健医療専門家）



施設分娩はなぜ安全？

どうして病院に行ってお産をするの？

～モンボシ母子保健講座実施報告～

出産は人生の中の正常な営みであって、病気ではありません。病気ではなくても、出産のときは医療施設に行く習慣が今の日本には根付いています。その習慣と、妊産婦/新生児の死亡割合が世界で最も低い国の一つであるという事実は、互いに無関係ではないと思います。

一方、モンボシ地域では自宅でのお産の習慣があります。自宅で大丈夫なの？と私たちは思っていますが、「どうして病院に行ってお産をするの？」と逆に問い返されたときに、当然過ぎてその理由をきちんと説明するのはかえって難しいと感じます。世界一安全なお産の国から来た私たちが、自宅ではなく医療施設でのお産を奨めるために、住民保健委員会（2ページ参照）のメンバーたちが村人たちに施設でのお産を啓発できるよう、その理由をきちんと考えることにしました。

2014年9月5日、住民保健委員会のメンバーにモンボシ診療所に集ってもらい、「施設分娩はなぜ安全か？」というテーマの講座を開催しました。講座の前半では、分娩時に妊婦と新生児に起こりうるリスクと、それぞれのリスクの予防や治療をするために診療所で行っていることを復習しました。後半では、TICOスタッフと診療所の助産師アイビーによる劇を披露しました。

シナリオはこうです。

TICOスタッフの竹村俊男演じる24歳の妊婦は、これまで4回の妊

婦健診を受けています。妊娠38週に陣痛が来たので診療所にやってきました。今回2回目のお産です。杉本演じる助産師が診察していると、陣痛が強くなってきて元気な女の子を生みました。ところがその直後から大量の出血が始まります。慌てふためいた杉本はアイビー助産師に助けを請います。アイビーは、状況を確認して適切な処置（胎盤用手剥離、点滴、子宮収縮剤投与、子宮底マッサージ）を施して、出血は止まってひと安心。杉本が胸をなで下ろしていると、今度は突然妊婦の竹村がけいれん（子癇（しかん）発作）を起こします。再び杉本に呼ばれたアイビー助産師は、母体を保護し、けいれんを止める薬を使って状態は安定しました。

このシナリオに出てきた分娩時の出血と妊娠高血圧症（子癇）は、妊婦の死亡原因の半数以上を占めています。また、妊娠経過が順調な妊婦さんでも、分娩時には予測できないリスクを伴うことをこの劇は示しています。竹村の迫真の演技が見ている住民保健委員会のメンバーたちの笑いを誘い、アイビー助産師による解説を交えたデモンストレーションが、「施設分娩はなぜ安全か？」の回答を明確に説明していました。



その土地の考え方を変えていくことは簡単ではないですが、正しい知識と、変えなければならないという強い信念と、そして地域の人々からの信頼があれば、それは希望が持てるものだと思います。

2014年4月から開始されている本事業は、JICA（国際協力機構）から「草の根技術協力事業」として委託を受けて実施しています。

ザンビア募金☆進捗報告

瀬戸口 千佳（業務調整員）

完了!

マサカ・コミュニティスクール 教員用住宅の建設

（マサカ村）：76,103円



今回の支援でひとまず家らしくなりました。この教員用住宅の完成を受けて、有資格教員*の派遣はすでに確約済みです。新しい先生が来るのを、先生も父兄も子どもたちも楽しみにしています。

「もっともっと資格を持った先生に来てもらおうぞ!」と新たに意欲を燃やし、もう1棟分のレンガの準備がすでに始まっています。

*農村地区では特に生徒数に対する教員数が不足しており、地域の有志がボランティアで子どもたちに教えることは珍しくありません。有資格の先生に来てもらうためには、学校の近くに住める場所を準備する必要があります。

完了!

マケニ・コミュニティスクール改良換気型トイレ設置

（マケニ村）：69,855円

ついに3棟目が完成しました!

先に完成したのは生徒用（男女1棟ずつ）でしたが、これは教員と客人用のトイレです。今年の1月20日に実施された大統領選挙（5ページ参照）の投票所として校舎が使われた際にもこのトイレが活躍したそうです。



完成した3棟目のトイレ。



トイレ増設に関わったマケニ村の人々。

完了!

カリミナ小学校 教員用住宅の建設（資材の一部支援）

（カリミナ村）：92,127円

現在、カリミナ小学校で働いている先生（有資格教員）たち5人のうち3人は、学校の事務室や教室で暮らしています。先生たちに長く働いてもらうためには、快適な住居の提供は重要な条件。今回の支援で、あと屋根を載せるまでとなりました。

※カリミナ小学校は公立校として認定されており、コミュニティスクールと呼ばれる学校に比べれば恵まれていると言えます。よって本支援は全額支援ではなく、資材の一部を支援することで合意しました。



あとは屋根を載せれば完成。



右端の男性教員（ムタバさん）が入居予定。

出張健診用の小屋建設（ンジョブ村）：130,463円

これまで青空の下で行われていた月1回の出張健診（乳幼児健診、妊婦健診など）。受診に来るお母さんと子どもにとって、出張健診がもっと快適に行われるようにとの目的で建設が進められています。



着々と建設が進む。

青空の下、行われている出張健診。

橋の建設（NPO法人道普請人/京都大学との連携）

昨年の8月下旬から建設作業開始。いまでは人や自転車が、雨期で川が増水しても渡れるようになりました。雨期に入ったため、作業は一時中断。今年の6月に再開し、車が通れる橋にしています。



完成直後の橋。

雨期になると、一気に増水します。この写真の川の水かさは大人の胸くらい。

学費支援へのご協力をお願いします！！

ザンビアの学校は1月始まり。新たに8年生に進学してきた学生たちの中から、現在候補者を選定中です。が！！学費がなんと2014年は5400円だったのですが8000円へと急激な値上がり。このままでは、継続支援が約束されている新9年生の支援にほとんどのご寄付がいきまじ、新8年生の支援が非常に限られたものになってしまう。経済的に困難でも、勉強をがんばっている子どもたちが、引き続き教育を受けられるよう、1口以上のご寄付をどうかよろしくお願いいたします。

1口 3,000円

※うち約1割を管理費（生徒の選出や家庭状況の確認等学校側との打ち合わせにかかるスタッフ人件費、ガソリン代等）とさせていただきます。

3口で1人の生徒が学校に通えるようになります。

2口以上ご寄付いただきますと奨学生からお礼状が届きます。



「学費支援」とご指定の上、ご寄付ください。ご寄付の方法は巻末のページでご案内しています。

猫目線

最近、ザンビア事務所にやってきたインターンに、「社長」と呼ばれている猫のチャイです。スタッフの中で一番「出勤」が遅いからだと言いますが、それはともかく。

ザンビアではつい先日、国の長を決める大統領選挙(*)が行われ、与党PF（愛国戦線）のエドガー・ルング氏が接戦を制

し、当選しました。選挙期間中は、選挙カーならぬミニバスに、うぐいす嬢ならぬ体力のありあまった男たちが乗り込み、旗を振りまわしながら大きな音を立てて車道を走りまわったり、選挙公約を様々な歌手たちが歌にし、それらの歌が集められたCDが売っていたり。

でもご主人が一番びっくりしたのは、投票日がたった1日しか設けられていないこと。そして、その日は従業員を全員投票に行けるように雇用主は配慮せよ、という政府からのお達しが出されたことでした。

選挙というのは少なからず自分や自分の家族、将来の子どもたちの未来を選ぶということで、その権利を守るとは国として大事なことだと言っていました。社会環境に猫の生活だって影響されるのですが、私にその権利はありません。

ルングさん、誰にとっても住みやすい社会にしてくださいね。ニャー。

※2014年10月に任期途中で急逝したサタ大統領の補欠選挙で、今回選ばれたルング氏の任期はわずか18か月。2016年に再度、大統領選が行われる。

カンボジア便り



カンボジアでの研修のようす。

TICOでは今年度も昨年度に引き続き、香川県高松市と公益社団法人セカンドハンドが協働で実施しているカンボジア救急医療支援事業に保健医療専門家を派遣しています。

2014年8月にはカンボジアのスヴァイリエン州に赴き、現地の病院にて医療従事者を相手に研修を実施、そして9月には現地の医師5名を日本に招へいし、香川県と徳島県で視察や研修を行いました。

カンボジア現地の研修では、救急初療室でのABCDE（気道確保、呼吸管理、循環管理、意識状態の管理、体温管理）をテーマに行いました。患者の訴えがあったり外傷があったりすると、すぐに目に飛び込んでくるところだけを診察しようとしてしまいますが、それでは重症患者さんの症状に見落としが多くなり救命が難しくなってしまいます。身体状態全体をまず把握する習慣をつけるべく、デモンストレーションや模擬診療を行いました。

そして、日本では香川県の医療機関や消防局での視察を行いました。その後、2名の救急担当の中堅医師（スヴァイリエン病院のタオン・ソティア医師、チプー病院のイム・ボット医師）には徳島まで来てもらい、さくら診療所にて指導者向けのワンランク上の研修を受けてもらいました。呼吸管理、ショック患者対応、外傷初期対応、エコーの使い方、その他

渡部 豪（保健医療専門家）

の機材の使い方を実技指導した後、模擬診療（患者を設定して本当に診療しているように実演してもらう）を繰り返しました。

今回は、カンボジアでの現地研修から日本招へいまで、途切れることのない一連の流れを意識した研修に効果があったのか、2人ともかなりの手ごたえをつかんだようでした。

彼らが指導者となってスヴァイリエン州の救急医療レベルが向上することを信じてやみません。



さくら診療所にて研修を受ける医師たち。

チャレンジ 「Challenge」 という言葉

TICO 代表 吉田 修

チャレンジ、普通、日本では「挑戦」と訳される。国際協力の現場でも、よく使われる言葉である。

「あなたのプロジェクトで何が“チャレンジ”ですか？」意味は「何が大変ですか？」「何が困難ですか？」「できそうもないことは何ですか？」ぐらいのニュアンスである。非常にネガティブなことを聞いている。確かにアフリカでの様々なプロジェクトは困難の連続である。

それにもかかわらずチャレンジ「Challenge」という言葉には悲観的な、絶望的な響きがない。

困難があるのは当たり前で、それでも何とかそれを乗り越える、きっとやり遂げる、そのような意気込みがこの言葉には込められているのだろうか。日本も含めて世界では格差が拡大し、テロは増幅し、紛争は激化する一方である。

そして、地球温暖化も止められそうにない、せめて2℃の上昇にとどめようとの各国の合意も非常に難しそうである。特に日本は数値目標も未だに出せず、世界から最も消極的と見られている。原発事故の汚染水対策、除染、廃炉などの解決もめどが立たない。人類は、とても解決できそうもない大問題に包囲されていると感じるほどである。それでも諦めず「チャレンジャー」でいたいと思う。

チャレンジ「Challenge」もう一つの意味は「やりがい」である。

困難が大きいくらいやりがいもある、ということか。実にいい言葉である。

暗い気持ちになりがちな今日この頃であるが、明るく「チャレンジ」していこう。

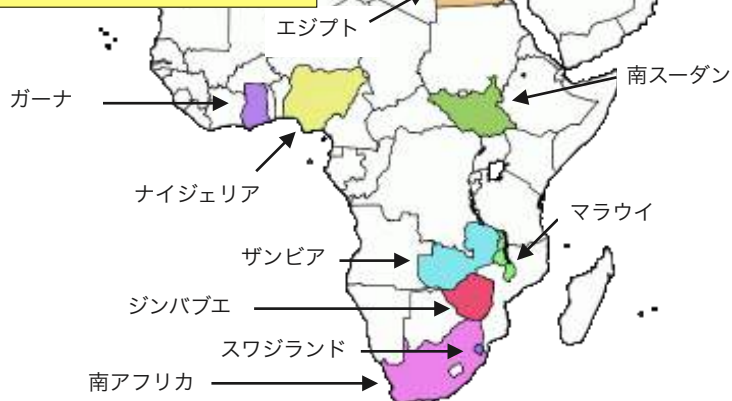


よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。写真は、ザンビアで活躍している救急部隊の通信室にて。



2014年12月、TICOは、JICA（日本国際協力機構）から青年研修事業「母子保健管理コース」を受託し、アフリカ9カ国から選ばれた17名に対して研修を実施しました。

研修員の出身国はアフリカ大陸の各地にまたがります。



昨年の12月は例年に比べて非常に寒く、各地で大雪が降ったこともご記憶に新しいのではないのでしょうか。研修員の出身国はアフリカ大陸の、しかも比較的温かい気候の国から来ているため、日本の寒さにとても驚いていました。最初は喜んでいた雪も次第に寒いだけのものになってしまったようでした。

研修員の日本滞在期間は、2014年12月1日から18日まで。そのうち、徳島県では12月4日から16日まで、約2週間にわたり県西部を中心に官公庁、医療機関、小学校などを訪れました。今回の研修に参加していたのは、それぞれの国で医師、看護師、助産師または保健師として母子保健に関わっている、これからの国を背負って立つ若い世代（20代～30代）でした。

多少のばらつきはありますが、それぞれの国における妊産婦死亡比（出生10万に対する妊娠中から産後42日以内の妊産婦の死亡数）と5歳未満児死亡率（出生1000人当たりの出生時から5歳になる日までに死亡する人数）が、戦前戦後の日本における状況に相当

JICA青年研修 母子保健管理コース実施

杉本 尊史（保健医療専門家）

し、そのときの日本の母子を取り巻く状況がどのようにして現在のような世界最高水準にまで改善されたのか、その背景を学んでもらうことにしました。しかしながら、日本における改善は、日本固有の要因も含みながら広く社会経済要因に関連し、それを直接解説するようなプログラムは現実的ではありません。徳島の様々な現場を見学し議論をすることで、研修員自身が考え、彼らなりの答えを見つけてもらうことを常に心がけた研修にしました。

最終日には、この研修で学んだこと、そして自国へ帰ってからの活動計画について、それぞれに発表してもらいました。どの発表も大風呂敷を広げることなく、手の届く範囲から出発できる確かな計画でした。また、医療機関だけでなく小学校でも研修を実施したこともあって、母子保健の改善要因として学校教育について触れる研修員も少なくなかったことは特筆に値すると思います。

そして、それぞれの国が抱える現状や課題について、研修員の声を聞き、他の研修員たちと一緒に議論したことは、TICOとしても大きな学びがありました。真剣に研修に取り組む姿に、母子の命を守りたい、状況は違えどその気持ちは世界共通であることを改めて認識しました。研修員の今後の活躍に期待しています！

最後に、今回の研修に関わっていただきました講師の皆様、関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。



日本人学生と一緒に「少子化」対策プロジェクトを考えました。



吉野川市立森山小学校にて、児童との交流を楽しみました。

事務局長 福士庸二のつぶやき

来年のお正月。。。。

日本の物流って、すごいですね。

インターネットの通販サイトで注文した商品が翌日には受け取ることができます。しかも、お届けの時間帯まで指定できてしまう時代。

日本の郵便システムもすごい！

届かない郵便物などありえないといっても良いくらいです。

さて、昨年(2014)の12月初旬、TICOザンビア事務所から会員の皆様や支援者の方々へ愛と感謝の気持ちを込めて年賀状をお送りしたようです。いや、間違いなく送っています。

すでに皆様のお手元へ、届いておりますでしょうか？
残念ながら、私にはまだ届いていません。

ザンビアの首都ルサカから東京まで、直線距離にして約12,920km、時間がかかるのはわかるけど、航空便にしたから、いくらなんでも、もう届いても・・・。

代表理事の吉田が青年海外協力隊にてマラウイに派遣されていた時、日本からの荷物が1年かけて届いたそうです。

来年のお正月が楽しみです。

▶今回、お送りしたTICO年賀状、今はいずこへ？



ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方(書き損じハガキ含む)

賀川豊彦記念館、さくら診療所、原田恵子、TICOユース、三井住友銀行ボランティア基金、副島光江、南波夏子、唐住洲子、花井郁恵、山下うやか、日浅芳一、岡崎明美、松本多江、秋月良子、橋本伸子みんなのチャリティー代表四宮久子、高松聖ヤコブ教会婦人会、堀俊朗、田淵規子、黒岩宙司、中村美恵子、杉本あや子、杉本尊史、福士庸二、匿名3名

会員を更新された方

笹井美由紀、長倉聖子、凌泰君、ホウエツ病院、塩田勉、井口千陽、田淵圭男・規子、神園素己、長野修身、高島百合、大多和通夫、久保真一・恵子、

松田恵美子、北島コーポレーション、NPO法人太陽と緑の会、中谷加奈子、池見真由、渡部豪・あかり、篠原幸隆・弘子、大塚和子、新居智次・和世、神谷保彦、白石吉彦、株式会社柚子りっ子、ヒラオカ薬局、中村美恵子、岩田祥三、森山庄八、金納千晴、坂東正章、秋月益子、加涌由貴、寺口カミコ、大島英子

新たに入会された方

山崎恵子、鈴記好博、田村実、近藤通弘、中西敬子

●2014年11月1日分～2015年1月31日

●順不同、敬称略

❖ TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICO季刊ニュースレター“Face to Face”を毎号お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000
正会員		¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649

加入者名 TICO

ご住所・ご氏名(フリガナ)・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。

なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧ください。



TICO季刊ニュースレター Face to Face 第39号

2015年1月発行 発行人: 吉田 修

編集: 近森 由記子

❖ TICOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649 (加入者名) TICO

銀行振込 — 四国銀行 山川支店 (店番号344)

普通 0199692

特定非営利活動法人TICO 代表理事 吉田修

カナ入力の場合は、トクヒ) テイコ

指定寄付 — 該当する項目を振替用紙の通信欄にお書き添え下さい。また、銀行振込の場合は、該当する項目を合わせてお知らせ下さい。

★ ザンビア募金 (ザンビア)

★ 学費支援 (ガレ)

クレジットカード — ホームページをご覧ください。

募金箱 — さくら診療所(徳島県吉野川市)に常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからお買い物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧ください。

書き損じはがき — 事務局までお送りください。

特定非営利活動法人 TICO 事務局

〒779-3403 徳島県吉野川市山川町前川120-4

電話: 0883-42-2271 (平日 9:30~18:30)

メール: info@tico.or.jp / ウェブサイト: www.tico.or.jp

フェイスブック: www.facebook.com/ticohq

ブログ: blog.goo.ne.jp/tico_blog